短　報

先天性耳道閉鎖を疑った犬の1例

丸子理恵[1)]　秋吉秀保[1)†]　中西　等[2)]　桑村　充[1)]
山手丈至[1)]　青木美香[1)]　大橋文人[1)]

1）大阪府立大学大学院生命環境科学研究科（〒598-8531　泉佐野市りんくう往来北1-58）
2）大阪府　開業（和泉動物病院：〒594-0065　和泉市観音寺町844-1）

（2008年9月22日受付・2009年12月15日受理）

要　　約

6歳齢，雌の雑種が，左耳後背部の腫脹を主訴に来院した．身体一般検査の結果では左外耳孔が認められなかった．CT検査およびMRI検査では耳道内および鼓室内に内容物が充満しており，その細胞診ではケラチンの残屑がみられただけであった．左耳道は嚢胞状に腫脹し，周辺組織を圧迫していたことから，全耳道切除術および鼓室胞切開術を行った．術中，耳道内および鼓室胞内には，黄緑色のチーズ状の物質が占拠していた．病理組織学的検査では，耳道内の皮膚は褶曲状を形成し，その内側に耳垢が集積していた．これによって画像検査および術中にみられた占拠物質は，残屑ケラチンであることが判明した．ケラチンの残屑に対する二次的炎症が散見されたが，耳垢から細菌は検出されなかった．以上の結果から，本症例は先天性耳道閉鎖を疑った．本症例は術後順調に経過している．

――キーワード：耳道閉鎖，犬，全耳道切除術．
日獣会誌　63，211～214（2010）

†　連絡責任者：秋吉秀保（大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻獣医外科学教室）
〒598-8531　泉佐野市りんくう往来北1-58　☎072-463-5476　FAX 072-463-5463
E-mail : sayochan@vet.osakafu-u.ac.jp